ぐるっと東北

母校をたずねる

「演劇人」伝説作りに躍起

作家 高橋克彦さん ＝1966年度卒

岩手高 1

ぐるっと東北「母校をたずねる」は今月から、岩手高校（盛岡市）編を連載します。1926年に旧制岩手中学校として創立された私立の伝統校です。初回は歴史小説やミステリー、SF、怪奇小説など幅広い分野で活躍する作家、高橋克彦さん(71)＝1966年度卒＝です。在学中に興味を持っていたのは小説よりも芝居だったと振り返ります。【佐藤慶】

（岩手高に進学した）一番大きな理由は、岩手中の時に演劇部に入ったことです。芝居をずっと続けたいという思いがありました。OBに（劇作家の）秋浜悟史さんがいて、演劇部は対外的にも有名でした。

ただ、その割に部費が少なくて、ろくな芝居が作れなかった。舞台にベンチ二つだけ置いて芝居するとか、人と人とのセリフだけの芝居が基本でした。その上、男子校なので男だけの芝居です。そんな脚本はほとんどなかったので、岩手中・高では部員が脚本を書く伝統がありました。

最初は部員で交互に書いていましたが、途中から「ずっとおまえが書け」となり、完全に座付き作者みたいになりました。中学から高校卒業するまでに12、13本は脚本を書いたんじゃないかな。

県の高校演劇連盟の連盟長も務めました。持ち回りだったので、連盟のために何かしたという記憶はありません。でも、盛岡で演劇に関わっている高校生全てを代表する存在でなくてはならないと思い、意図的に伝説作りにいそしみました。まともに学校に行って授業を受けて良い成績を収める、なんてのは演劇人じゃねえ、みたいな思い込みがあったからです。

雨の日は長靴がないという理由で学校を必ず休んだり、教室までカツ丼などの店屋物を出前させたり――。出前をとったときは下級生がぞろぞろくっついてきました。教室に出前のおじさんが来て、びっくりしたのでしょう。試験のときは勉強せず、1年では全体で15番以内だった成績が、ものの見事に2年の夏には170番台まで落ちてしまいました。

高校生活の一番大きな宝物は、当時校長だった山中順三先生との出会いです。「遊びに来い」と言ってくれて、週に1回くらい先生の自宅に行っていました。当時は、休学して旅したヨーロッパから戻った頃です。旅行先で浮世絵について尋ねられ、答えられなかったことから、浮世絵の画集などを読み始めていました。「浮世絵を勉強するなら読まなきゃ駄目だよ」と永井荷風の江戸芸術論をいただきました。また、後に浮世絵の鑑賞事典を出版したときには、浮世絵研究の第一人者だった高橋誠一郎先生を紹介してもらいました。本当にかわいがってもらいました。

岩手高はある意味、割とおおざっぱなところがあるけれども、そのおかげで自由に生きていられましたね。あの時代の方が面白かったな。

たかはし・かつひこ　1947年、釜石市生まれ。早稲田大卒業後、初の著作となる「浮世絵鑑賞事典」を出版。「写楽殺人事件」で第29回江戸川乱歩賞を受賞。「緋（ひ）い記憶」で第106回直木賞、「火怨（かおん）」で第34回吉川英治文学賞を受賞。95年、当時中断していた「盛岡文士劇」を復活させるなど多方面で活躍している。学生時代を含めたエピソードは「幻日」（文春文庫）に収録されている。

私立中高一貫の男子校

岩手高（盛岡市長田町）は私立中高一貫の男子校で今年創立93年を迎える。前身は旧制岩手中学校で、1926年に実業家の三田義正（ぎしょう）が私財を投じて創立した。当時の若者の緩んだ考え方を憂え、社会に役立つ人材を送り出そうと考えたという。

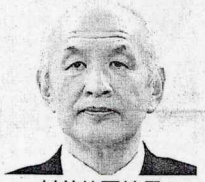
県最高峰で、県のシンボルの一つとされる岩手山山頂に、学校の記念碑がある。建立は創立間もない29年で山頂から約300メートル下につくった作業場で、石工が花こう岩を碑に仕立て、3、4年生100人が頂上に引っ張り上げたという逸話が残っている。

学制改革で、戦後の48年に新制岩手高となり、2008年に中高一貫校の認可を受けた。「養正、重暉（きしょう）、積慶」が校訓だ。

第9代校長の村井伸吾さん(62)は「文武両道の精神のもと部活動も盛んです。自ら学び礼儀正しく他人を思いやれる生徒を育てています」と話す。【滝沢修】

（毎週金曜日に掲載）

岩手高校の校舎＝盛岡市長田町で



村井伸吾校長

卒業生「私の思い出」募集

岩手高卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。卒業年度、氏名、生年月日、職業、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100―8051、毎日新聞地方部「母校」係（住所不要）へ。メールの場合は shuto@mainichi.co.jp へ。いただいた「思い出」は紙面や、毎日新聞ニュースサイトで紹介することがあります。